

幼児教育における言語環境の重要性

—ビオトープにおける活動と自然に関する絵本を通して—

The Importance of Language Environment in Early Childhood Education: Through Activities in the Biotope and Picture Books about Nature

杉本孝美（桃山学院大学）※1

※1 桃山学院大学 わかやま子ども学総合研究センター特別研究会員

本研究は、幼稚園でのビオトープにおける活動と自然に関する日本語および英語絵本の読み合いが、幼児の言語発達と相互尊重の態度に与える影響を検討した。年長児を対象に参与観察を行った結果、自然や他者への配慮を言葉で表現する姿や、体験と結びついたトランスランゲージング（translanguaging）的言語使用が見られ、対話が協働的な劇づくりへと発展し、共生的態度の形成が示唆された。本実践の教育的意義は大きいと考えられ、継続的实践が今後の研究課題である。

キーワード：自然活動、絵本の読み合い、言語環境、トランスランゲージング、共生

1 はじめに

近年、デジタル化された情報が氾濫する社会において、幼児教育の在り方も大きく変化している。ICT環境の整備は重要である一方で、幼児教育の本質である体験を通じた学びを見失ってはならない。幼児期後期は、言葉を媒介として自己表現を行い、他者との関係性を築く基盤が形成される重要な時期である。自然体験は子どもの感性や言語表現を豊かにするとされ、松居（2013）は、絵本の読み合いが語彙の獲得や想像力の発達を促すことを指摘している。さらに、Cummins（2001）やGarcía & Wei（2014）は、多言語・多文化環境における言語使用の重要性を示し、幼児が複数の言語資源を柔軟に統合して用いる可能性を論じている。特に、遊びや実体験を基盤とした活動は、言語発達を促進すると同時に、他者理解や相互尊重の態度を育む可能性を有している。本研究では、幼稚園でのビオトープにおける活動と自然に関する絵本の読み合いを組み合わせて

た実践を通して、幼児の言語発達および相互尊重の態度の形成について検討することを目的とする。

2 研究の目的と方法

本研究の目的は、幼稚園でのビオトープにおける活動と自然に関する絵本の読み合いを通して、幼児がどのようにことばを獲得し、他者や自然を尊重する態度を育んでいるのかを明らかにすることである。研究方法として、幼稚園年長児（5・6歳児）クラスを対象に、1年間にわたる参与観察を実施した。園児の日常的な活動、遊び、会話、表現活動を記録し、実践の過程と変容を質的に分析した。

3 先行研究の整理

3.1 幼児の言語発達と遊び

Vygotsky (1978) は、幼児の言語発達が他者との社会的相互作用の中で促進されることを指摘し、特に遊びを通してたやり取りが思考と言語の発達を結びつける重要な契機になると論じている。子どもは遊びの中で役割を担い、他者と意味を共有しようとする過程を通して、語彙や文の構造を自然に獲得していく。また、Bruner (1983) は、共同注意やスキヤフォールディングの概念を示し、大人や仲間との関わりが子どもの言語活動を支え、発達の最近接領域を広げる役割を果たすことを明らかにした。

国内研究においても、遊びを媒介とした言語経験が幼児の語彙量や表現の多様性、語る力の発達に寄与することが報告されている。津守 (1997) は、自然物を単なる教材としてではなく、子どもにとって生活を共にする存在として捉え、自然との関わりを含む遊びの中で、子どもが感じたことや考えたことを言葉にする経験が積み重なることで、言語が豊かに発達していくと述べている。これらの知見は、幼児期における遊びが、言語発達の基盤となる重要な学習環境であることを示している。

3.2 複言語・複文化環境における言語習得

García & Wei (2014) は、translanguaging の概念を用いて、幼児が言語を日本語や英語といった固定的な枠組みで使い分けるのではなく、自身の経験や感情、状況に応じて複数の言語資源を柔軟に統合しながら意味を構築していることを示している。この視点は、言語を「正しく使う」ことよりも、「伝え合う」ことに価値を置くものであり、幼児の自然な言語発達の姿を捉える上で重要である。

こうした考え方は、外国にルーツをもつ子どもだけでなく、日本語を母語とする子どもにとっても有効であり、異なる言語や文化に触れる経験が、言語への柔軟な態度や他者理解を育む可能性が指摘されている。杉本他 (2025) は、複言語・複文化環境においては、言語の量や形式以上に、子ども同士や大人とのコミュニケーションの質が重要であるとし、相互に認め合い、尊重し合う関係性の中で言語活動が展開されることが、自己肯定感や他者尊重の態度の基

盤形成につながると述べている。これらの研究は、幼児期の言語習得を、個人内の能力獲得としてだけでなく、社会的・文化的な関係性の中で捉える必要性を示唆している。

3.3 自然体験と絵本の活動

自然体験は、子どもの五感を刺激し、感性や社会性を育む重要な要素であり、身近な自然に触れる経験が情緒の安定や他者との関わりを豊かにすることが指摘される。とりわけ、園庭における自然環境は、子どもが主体的に関わり、発見や驚きを共有する場となり、その過程で生まれる対話ややりとりが、言語的・認知的発達を支える基盤となることが示される。また、自然物を介した遊びは、経験と言葉を結びつける機会を増やし、表現の幅を広げる点でも重要である。

一方、絵本の読み合いは、語彙の獲得や物語理解にとどまらず、登場人物の気持ちを想像したり、他者の視点に立って考えたりする力を育む活動として位置づけられる。特に、多様な文化や価値観が描かれた絵本に触れることは、幼児が自分とは異なる背景をもつ他者を受け止める態度を育てる契機となる。宮地 (1996) は、外国語絵本の導入が異文化理解を促進し、言語や文化の違いを肯定的に捉える姿勢の形成につながると指摘している。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では、自然体験と絵本活動を基盤とした複言語・複文化環境が、幼児の言語発達にどのような影響を与えるのかを検討するとともに、子ども同士の関わりや表現の変化を通して、相互尊重の態度がどのように育まれていくのかを、幼稚園学習指導要領「言葉」における「ねらい」と「内容」を確認しつつ、具体的な実践事例に基づいて検討する。

4 幼稚園教育要領「言葉」

幼稚園教育要領「言葉」には、以下のように「ねらい」と「内容」が示されている。

4.1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。

- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

4.2 内容

- (1) 先生や友達の話や言葉に興味や関心をもち、親しみを持って聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどをしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、わからないとことを尋ねたりする。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常のあいさつをする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。
- (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

このように、幼稚園教育要領「言葉」には「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」と示されている。言語活動を通じた楽しさ、喜び、親しみといった情意面での言語との関わりが重視されており、その上で、言語を運用する場面を具体的に示し、言語感覚や想像力、関心・意欲・態度を育成しようとしている。体験を通して自然な形で言語獲得と運用を目指していることがわかる。

5 実践の概要

5.1 実践の経過

本実践は、対象園の年長児(5・6歳児)クラスを対象に、1年間継続して行われたものである。対象園は自然環境に

恵まれ、園周辺の里山や畦道などを日常的な保育環境として活用している。本実践では、こうした自然体験を基盤に、ビオトープづくりや自然に関する日本語および英語絵本の読み合いを組み合わせた活動を展開した。以下、図1～14に沿って実践の経過を整理する。

5.1.1 図1(里山環境その頃読んだ英語絵本)について

園児が園周辺の畦道や里山に出かけ、草花や虫、小動物に触れながら遊ぶ様子が観察された。子どもたちは、季節による自然の変化や生き物の営みに気づき、捕まえた虫を観察したり、葉っぱや実を手にとったりしながら、自然との関わりを深めていた。その過程で、園児は生き物の存在や命の循環について関心を示し、「生きていること」「死ぬこと」「またつながっていくこと」といった問いを自然に言葉にし、自身も自然の一部であることを体感している様子がうかがえた。

こうした自然体験と並行して、絵本“Ten Seeds”の読み合いを行ったところ、園児は物語に描かれる種の成長や命のつながりを、自分たちが畦道や里山で体験した出来事と結び付けながら受け止めている様子だった。絵本の読み合いの場面では、「この種もまた土になるのかな」「虫が来たらどうなるのだろう」といった自発的な発言が見られ、園児が自身の経験と物語世界を往還しながら、命の循環や自然との共生について考えを深めていることが確認された。このように、実体験と絵本活動を結び付けることで、園児の気づきや言語表現がより豊かに展開していく様子が示された。

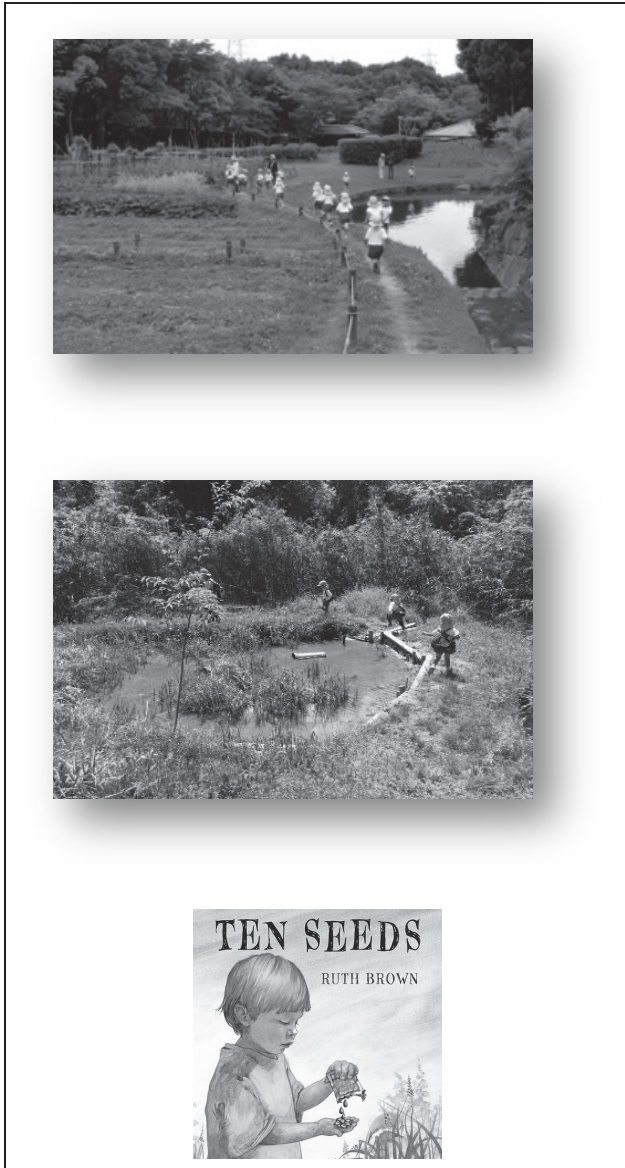


図1 里山環境とその頃読んだ英語絵本

見られ、園児が実体験に基づいてイメージを共有しようとする姿がうかがえた。

このようなねんど遊びは、単なる造形活動にとどまらず、園外での体験を再構成し、意味づけ直す遊びとして機能していたと考えられる。園児は、身体を通して得た感覚や気づきを、言葉や形に置き換えながら、仲間と対話的に遊びを発展させていた。すなわち、体験が遊びへと昇華される過程を通して、ビオトープに対する理解が深まり、次の園内での実践活動へとつながる基盤が形成されていたことが示されている。

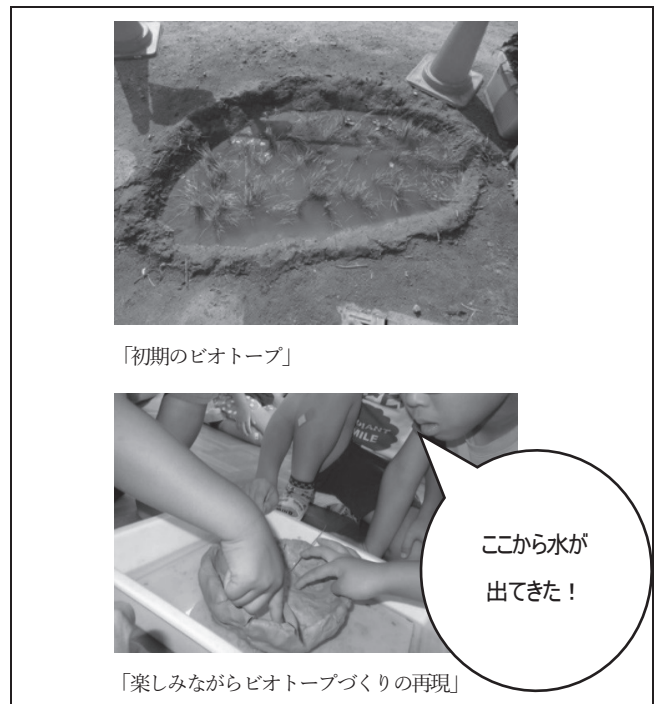


図2 初期のビオトープとねんどあそび

5.1.2 図2（初期のビオトープとねんどあそび）について

本場面は、ビオトープづくりの初期段階において、園外での自然体験が園内での活動へと有機的に接続されている様子を示している。園児は、畦道や里山で見聞きした水の流れや土の感触、生き物のすみかといった体験を思い起こしながら、ねんど遊びの中でビオトープの構造を表現していた。池や水路、土の盛り上がりなどを形づくる過程では、「ここに水が流れる」「ここに虫が来る」といった発言が

5.1.3 図3（つばめになっている様子とその頃読んだ絵本）について

園につばめが飛来したことを契機として、園児は園舎周辺につくられたつばめの巣を継続的に観察する活動に取り組んだ。巣の形や材料、親鳥の行動、ひなの成長の様子に目を向けながら、園児は気づいたことを互いに伝え合い、生き物のくらしに対する関心を深めていった。また、地域の人々から話を聞いたり、材料の提供や助言を受けたりす

る中で、園児は人と自然、生き物とのつながりについても学ぶ機会を得ていた。

こうした観察活動と並行して、園内ではつばめの巣づくりを再現する遊びが行われ、園児は土や草、身近な素材を用いながら、試行錯誤を重ねて巣の構造を表現していた。この時に、『ツバメのくらし』『ツバメのたび』といった絵本を読み合うことで、園児はつばめの視点に立って環境や行動を考える姿を見せ「どうしてここに巣をつくるのだろう」「長い旅は大変そうだ」といった発言が自発的に生まれていた。これらの活動を通して、園児は実体験と絵本の内容を結び付けながら、生き物への理解を深め、命を尊重する態度や他者の立場を想像する力を育てていった様子が見えてきた。



図3 つばめの気持ちになっている様子とその頃読んだ絵本

5.1.4 図4・5 (ビオトープがある環境で自然と共に生活する子どもたちとその頃読んだ絵本) について

園内ビオトープや里山での活動時には、園児が虫眼鏡や図鑑を携行し、生き物の様子を継続的に観察する姿が見られた。水辺や草むらに目を凝らしながら、小さな変化にも気づこうとする姿勢が育まれ、発見したことをその場で言葉にしたり、友だちと共有したりする場面が多く観察された。特に春季には、ビオトープの水中でおたまじゃくしの成長過程を見つけ、「足が出てきた」「色が変わってきた」といった具体的な発言が自然に生まれていた。

こうした実体験と並行して、絵本『ちいさなみどりのかえるさん』『おたまじゃくしの101ちゃん』の読み合いを行ったところ、園児は物語に描かれるおたまじゃくしやかえるの姿を、自分たちが観察した生き物の変化と重ね合わせながら受け止めていた。読み合いの場面では、「この子も大きくなるのかな」「さっき見たのと同じだね」といった発言が見られ、園児が体験と物語を往還しながら、感情や思考を豊かに表現している様子がうかがえた。このように、観察活動と絵本活動を結び付けることで、生き物への理解が深まるとともに、言語表現の質と量が高まっていく過程が示されている。



図4 ビオトープがある環境で自然と共に生活する子どもたち



図5 図4の頃読んだ絵本

5.1.5 図6（お友達と言葉を交わすことを楽しむ）について

はなむぐりを発見した場面では、園児同士がその存在に気づいた喜びを共有し、「ここにいたよ」「花の中から出てきたね」といった言葉で互いに伝え合う様子が観察された。中には、これまでの観察経験や図鑑で得た知識をもとに、体の色や動き、生活の様子について説明しようとする園児もあり、発見を契機として対話が自然に広がっていった。

その後、科学絵本『はなむぐり』の読み合いを行うことで、園児は絵本に示された表現や語彙を援用しながら、自身の体験を言語化する姿を見せていた。「絵本と同じだね」「こうやって動いていたよ」といった発言が見られ、実体験と物語・科学的な説明が結び付けられていることがうかがえた。こうした言葉のやりとりは、単なる情報共有にとどまらず、生き物の動きや特徴を身体表現で再現しようとする遊びへと発展し、後の劇活動につながっていった。すなわち、観察—読み合い—表現という一連の活動を通して、園児の言語活動が創造的な表現活動へと展開していく過程が示されている。



図6 お友達と言葉を交わすことを楽しむ

5.1.6 図7・8・9（蝶の幼虫を発見した時、蝶の脱皮と吸蜜を再現とその頃読んだ絵本）について

ヒョウモンチョウの幼虫を発見した場面では、園児がその存在に強い関心を示し、「みなみちゃん」と名前を付けて、愛着をもって継続的に観察する姿が見られた。毎日のように幼虫の大きさや色の変化、動きに目を向け、「昨日より大きくなった」「皮がぬげているよ」といった気づきを言葉にしなが、成長の過程を共有していた。こうした関わりを通して、園児は一つの命と向き合い、世話をする感覚を自然に身につけていった様子がうかがえる。

観察活動と並行して、園児は幼虫やチョウになりきった表現遊びを行い、脱皮の様子や羽化後に花の蜜を吸う姿などを、身体の動きや言葉で再現していた。友だち同士で役割を交代しながら表現を工夫する中で、「こうやって動くんじゃない」「花はここにあるよ」といった対話が生まれ、表現活動がより豊かに展開していった。

この時期に科学絵本『ぎふちょう』を読み合うことで、園児はチョウの生態や成長過程を物語・科学的な言葉と結び付け、自身の体験をあらためて意味づけていた。絵本の表現を手がかりに語彙や表現が広がり、体験と言語表現が相互に作用しながらさらに深化していく過程が示されている。



図7 チョウの幼虫を発見した時とその観察



図8 チョウの脱皮と吸蜜の再現



図9 図7・8の頃読んだ絵本

5.1.7 図10・11 (さつまいも掘り体験とことばの育み、実体験を再現と確認) について

秋のさつまいも掘りの活動では、土に直接触れる体験を通して、生き物への配慮を伴う行動や言語表現が確認された。園児は、土の中にはミミズや虫などの生き物が暮らしていることを想像し、「ここにいるかもしれないから、そっとしよう」「傷つけないようにね」と声を掛け合いながら、慎重に掘り進める姿勢を示していた。このようなやりとりから、園児が体験を通して他者や生き物の存在を意識し、その立場に立って行動しようとしている様子がうかがえた。

活動後には、さつまいも掘りの経験が遊びの中で再現され、園児は積み木や砂、身近な素材を用いて畑の様子を表したり、役割を分担して掘る動作を真似たりしていた。その際、絵本や図鑑を参照しながら「さつまいもはこうやってできるんだよ」「この虫も土の中にいるね」といった発言が見られ、体験で得た知識や気づきを互いに共有していた。こうした活動を通して、実体験が遊びや言語表現へとつながり、生き物への理解や思いやりの態度がより深まっていく過程が示されている。

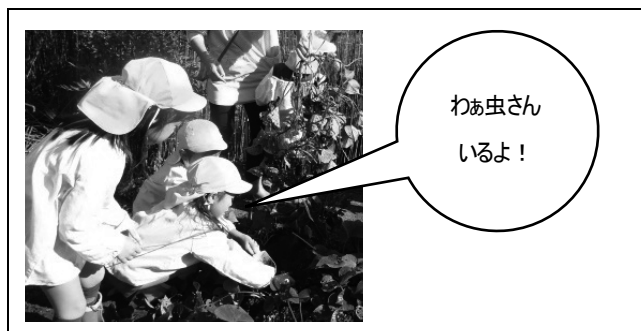




図 10 さつまいも掘り体験とことばの育み



図 11 実体験の再現と確認

5.1.8 Picture 12 (Picture10・11の頃読んだ絵本)について

日本語の絵本『うえにはなあとしたにはなあと』および英語絵本“Up Down” “Over Under”を読み合う活動を行ったところ、園児はそれぞれの言語の違いを強く意識することなく、絵や語りの流れを手がかりに内容を理解しようとする姿を見せていた。読み合いの場面では、「さっき見た木と同じだね」「下には虫がいるよ」といった発言が聞かれ、園児が日常の自然体験や遊びの中で得た経験と絵本の場面を照応させながら理解を深めている様子がかがえた。

また、日本語と英語で表現が異なる箇所に出会っても、園児は意味の共通性に注目し、身振りや指差し、既存の語彙を用いて反応していた。このような関わりを通して、園児は言語を固定的な枠組みとして捉えるのではなく、体験に根ざした意味理解を基盤に、複数の言語を柔軟に受け止めていたと考えられる。すなわち、外国語（英語）の絵本の読み合いが、園児の経験世界と結び付いた理解を促し、自然なかたちで言語への親和性を高める契機となっていたことが示されている。

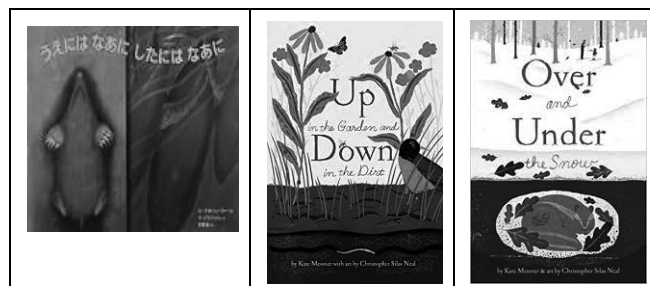


図 12 図 10・11の頃読んだ絵本

5.1.9 図 13（体験を発表へ）について

本場面は、体験したことを言葉で伝える発表活動の一場面であり、園児が「相手に伝える」ことを強く意識しながら表現を工夫している様子が見られた。園児は、自分が見たことや感じたことを順序立てて話そうとしたり、身振りや指差しを交えたりしながら、聞き手にわかりやすく伝えようとしていた。また、友だちの反応を確かめながら言葉を選び直したり、言い換えたりする姿も観察され、伝達を目的とした言語使用が促されていることがうかがえた。このような発表活動を通して、園児は単に体験を再現するだけでなく、他者の存在を意識したコミュニケーションの在り方を学んでいたと考えられる。すなわち、発表の場が、言語表現の発達とともに、相互理解や他者尊重の態度を育む重要な学習機会として機能していたことが示されている。

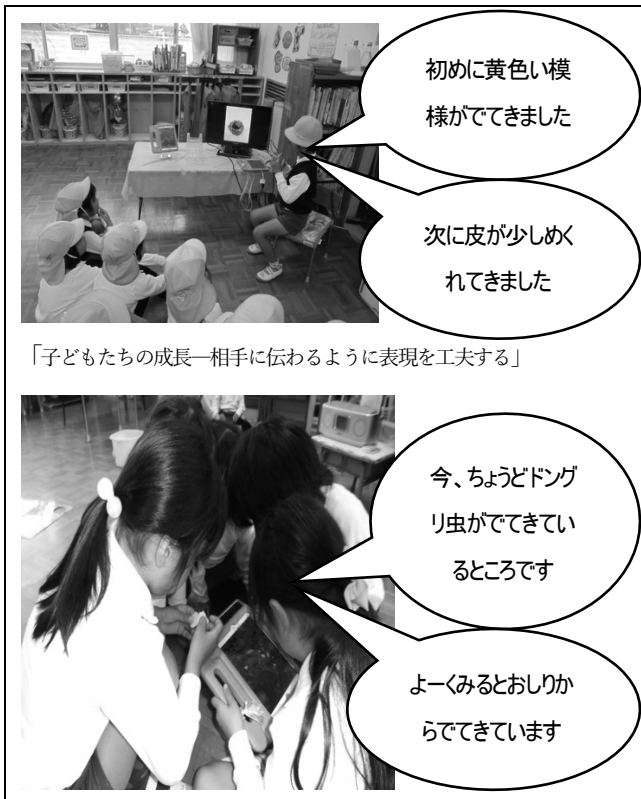


図 13 体験を発表へ

5.1.10 図 14 (すべての体験を劇に) について

本場面は、年度末の生活発表会において行われた劇活動の一場面である。園児は、園内ビオトープでの観察や里山での自然体験、絵本の読み合いなど、1年間にわたる豊かな経験をもとに、それぞれが生き物の役になりきり、即興的に物語を構成していた。誰がどの場面で登場するか、どのような出来事が起こるかについては、活動の中で園児同士が相談しながら決めており、体験の記憶や印象深かった出来事が自然に物語の展開に反映されていた。

劇には台本は全く用意されておらず、園児自身のことばや動きが中心となって場面が進行していた。園児は互いの発言を受け止めながら言葉をつなぎ、自分なりの表現で役の思いや状況を伝えようとしていたことから、即興的なやりとりを通して物語が形づくられていたといえる。このような劇活動は、1年間の体験を言語と身体表現によって統合する場となり、園児の言語表現力や想像力、さらには他者と協働して表現する力が総合的に発揮される機会となっていたことが示されている。

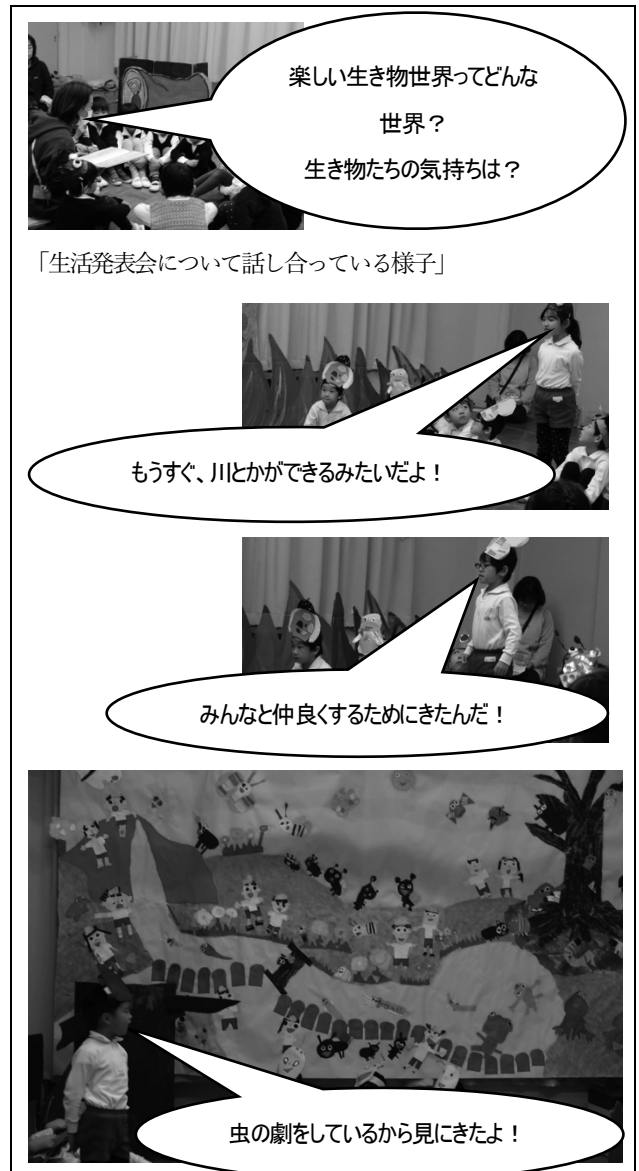


図 14 すべての体験を劇へ

5.2 観察結果

5.2.1 言葉の広がり

観察の結果、ビオトープでの体験が一過性の活動にとどまらず、園内外の遊びや表現活動へと持続的に接続されていることが確認された。園児は、自然の中で出会った生き物や出来事を遊びの中で繰り返し取り上げ、その都度新たな気づきや解釈を加えながら言語表現を広げていた。特に、生き物の視点に立ち、その気持ちや行動を代弁するように語る姿が多く見られ、体験を単なる事実の再生ではなく、意味づけを伴った言語化として捉えている様子が見られた。

また、絵本の読み合いを通して出会った語彙や表現が、日常の会話や遊びの中に自然に取り込まれており、園児は

日本語と英語を明確に区別することなく、状況や相手に応じて柔軟に用いていた。このような言語使用は、体験に根ざした理解を基盤として複数の言語資源を活用する姿であり、複言語・複文化環境の中での自然な言語発達の様相を示しているといえる。

さらに、これらの言語活動は年度末の生活発表会における劇活動へと発展し、園児は1年間の体験を物語として再構成しながら、言語と身体表現を統合して表現していた。すなわち、ピオトープでの体験を起点とした一連の活動を通して、体験と言語表現が相互に作用し合い、豊かな学びとして結実していることが明らかになった。

5.2.2 相互尊重の態度

幼稚園でのピオトープにおける活動や劇活動の過程では、生き物や他者への配慮を伴う発言や行動が多く観察された。園児は、生き物を扱う際に「びっくりしないようにしましょう」「かわいそうだからそっとね」と声を掛け合いながら行動し、命ある存在として尊重しようとする姿勢を示していた。また、劇活動においても、自分が演じたい役割や表現したい動きを言葉で伝える一方で、友だちの意見や表現に耳を傾け、「それいいね」「じゃあ次はこうしよう」と応答しながら、活動を協働的に進めていた。

このようなやりとりを通して、園児は自分の思いや考えを表現する力だけでなく、他者の立場や気持ちを理解しようとする態度を育んでいたと考えられる。すなわち、言葉を媒介とした対話的な活動が、相互理解を深めるとともに、他者や生き物を尊重する態度の形成を支えていたことが示唆される。これらの結果は、体験を基盤とした言語活動が、社会性や倫理観の育成にも寄与する可能性を示すものといえる。

6 考察

本実践は、幼児が地域の人々とともにピオトープを構築し、その実体験と自然に関する絵本の世界を往還する過程において、言語の獲得と社会的態度の形成が相互に促進されることを示している。この実践の教育的意義について、Vygotsky (1978)、Bruner (1983)、García & Wei (2014)の理論的枠組みを踏まえ、以下の三点から考察する。

第一に、幼稚園でのピオトープにおける活動は、Vygotsky が指摘した「社会的相互作用を通じた言語発達」を具体的に体現する場となっていた。園児は、生き物の発見や観察を契機として、誰が見るか、誰が伝えるかといった役割を自然に分担し、互いに声を掛け合いながら活動を進めていた。その過程では、「ここにいるよ」「そっとだよ」といった発話が連鎖的に生まれ、個々の気づきが他者との対話を通して共有・深化していく様子が確認された。

特に、土中の虫や小さな生き物の気持ちに心を寄せる発言に見られるように、あそびの中で生じた感覚的な気づきが、他者とのやりとりを介して言語化されており、これは発達の最近接領域における学びが、教師主導ではなく、子ども同士の関係性の中で自然な形で生起していたことを示している。友だちの発言に触発されて表現を言い換えたり、補足したりする姿も見られ、相互作用が言語発達を支える媒介として機能していたと考えられる。

また、生き物や仲間への配慮を伴う表現が繰り返し生み出されていた点は、自然環境を媒介とした活動が、認知的側面にとどまらず、社会的・情意的発達と結びついた言語使用を促していることを示唆している。すなわち、ピオトープにおける活動は、言語を単なる伝達手段としてではなく、他者や環境との関係を調整し、意味づけるための道具として用いる力を育む場となっていたといえる。

第二に、自然に関する絵本の読み合いは、Bruner が論じたスキヤフォールディングの機能を果たしていたと考えられる。とりわけ外国語（英語）の絵本の活用においては、教師が語彙や文構造を直接的に教えるのではなく、園児がこれまでに経験してきた自然体験や遊びの記憶と、絵本に描かれた場面や表現とを結び付けられるような環境が意図的に整えられていた。その結果、園児は絵や文脈、身振りといった複数の手がかりを用いながら意味を推測し、自発的に内容理解を深めていく姿を見せていた。

この過程において、園児が言語を日本語と英語を意識的に切り分けて使用する様子はほとんど見られず、むしろ「わかったこと」「伝えたいこと」を中心に、既存の語彙や表現を柔軟に組み合わせ用いていた点が特徴的である。これは、García & Wei (2014) が示す translinguaging の概念に沿い、幼児が自身の経験世界と結び付いた言語資源を統合的に活用して意味を構築している姿と捉えることができる。

さらに、絵本という共有された媒介が存在することで、理解が不十分な部分についても友だちの発言や反応を手がかりに補充され、相互作用の中で理解が深まっていったと考えられる。このような関わりは、スキヤフォールディングが大人から子どもへ一方向的に提供されるものではなく、子ども同士のやりとりの中でも機能し得ることを示している。

以上のことから、本実践は、複言語・複文化環境が幼児の言語発達にとって負担となるのではなく、むしろ意味構築や表現の幅を広げるための豊かな資源として機能し得ることを示す、実践的かつ理論的意義をもつ事例であるといえる。

第三に、園児の日常的な会話や遊びの中で生まれた発話が、年度末の生活発表会における劇として再構成されていく過程は、言語活動が個人的経験の表出にとどまらず、社会的実践へと拡張されていく様相を示している。Brunerが指摘するように、物語的思考は自己の経験を整理し、他者と共有するための枠組みとして機能するが、本実践においては、園児が生き物の役になりきりながら劇を協働的に構成することで、その枠組みが具体的な表現活動として表出されていた。

劇活動の過程では、園児は自分が表現したい出来事や気持ちを言葉で提案しつつ、友だちの発言や動きに応じて物語の流れを調整していた。「次はこうしよう」「それも入れよう」といったやりとりに見られるように、対話を通して物語が形づくられており、個々の経験が集団の物語へと統合されていく過程が確認された。

このような活動を通して、園児は自分の考えを他者に伝える力と同時に、他者の意見や視点を受け入れ、折り合いをつけながら表現を進める姿勢を身につけていったと考えられる。すなわち、ここでは、ことばが単なる情報伝達の手段としてではなく、関係性を調整し、共同的な意味を生成するための資源として機能していたと捉えられる。この点において、劇活動は、言語発達と社会性の育成が統合的に進む場として、重要な教育的意義を有しているといえる。

以上のことから、ピオトープという共同的な自然環境と、自然に関する絵本の読み合いを組み合わせた本実践は、Vygotsky 的な社会的相互作用、Bruner 的な支援的環境、García & Wei の示す translinguaging を統合的に包含する実践モデルであるといえる。幼児は言語を体系として学ぶ

のではなく、経験を媒介する道具として用いながら、他者や自然との関係性を構築していた。本実践は、複言語・複文化環境において、幼児の言語発達と相互尊重・共生的態度を同時に育む可能性を示す点で、教育的・理論的意義を有すると考えられる。

7 おわりに

本研究では、幼稚園におけるピオトープにおける活動と自然に関する絵本の読み合いを組み合わせた実践を通して、幼児のことばの発達と相互尊重の態度を育むことを示唆している。結果として、以下の知見が得られた。

第一に、幼稚園でのピオトープにおける活動は、園児が他者や生き物に配慮しながらことばを発する機会を生み出していた。

第二に、自然に関する絵本の中でも特に外国語の絵本は、園児が言語の境界を意識せずに新たなことばを取り込み、活用する契機となっていた。このことはことばの概念を広げることにつながっていると言える。

第三に、幼稚園でのピオトープにおける活動を中心にした園児の日常的な会話が生活発表会の劇活動へと発展する過程において、相互尊重と協働の態度が言語を媒介に形成されていた。

これらの知見は、複言語・複文化環境をつくり、幼児の言語的発達のみならず、他者理解や共生の態度を培う可能性を持つことを示している。今後は、複言語・複文化環境における幼児の言語使用をより長期的に追跡するとともに、多園や異なる年齢層での比較研究を行うことが課題である。

倫理的配慮

本研究を遂行するにあたり、幼稚園での実践観察等が必要であった。その際に、本研究の趣旨を関係者に十分説明し、理解・承諾を得た上で行なった。また、肖像権が生じ、個人や団体（園）が特定され、不利益や人権上の問題がないように最大限の配慮を行った。具体的には、コンプライアンスの遵守、個人情報保護法並びに都道府県個人情報保護条例に厳格に従うほか、園という個人のプライバシー、人権が最大限に守られる教育の場であることを深く認識し、趣旨に賛同してくださった個人や園に対して深く感謝申し上げた。

また、依頼先とは常に連絡を取り合い、情報提供や削除の申し出があった場合は、即座に対応する。そして、本研究終了後には、研究目的で収集した個人情報ならびに個人が特定される可能性のある情報についてはすべて廃棄する。

付記

この論文は、日本国際理解教育学会第34回全国研究大会で発表した内容を一部改変したものである。

参考文献

- Bruner, J (1983) “*Child’s Talk: Learning to Use Language*” Oxford University Press.
- Frances Barry・たにゆき(翻訳) (2008) 『ちいさなみどりのかえるさん』 大日本絵画
- García, O. & Wei, L (2014) “*Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*” Palgrave Pivot.
- Kate Messner (2014) “*Over and Under the Snow*” Chronicle Books.
- Kate Messner (2017) “*Up in the Garden and Down in the Dirt*” Chronicle Books.
- Jim Commins (2001) “*Bilingual Children’s Mother Tongue: Why is it important for education?*” Sprogforum, 7, 15-20.
- Laura M. Schaefer・木坂涼(翻訳) (2008) 『うえにはなあにしたにはなあに』 福音館書店
- Roth Brown (2010) “Ten Seeds” Andersen Press.
- Vygotsky, L. S (1978) “*Mind in Society*” Harvard University Press.
- 内田千春(2018)「複言語環境で育つ乳幼児期の子どもの『ことばの獲得』を考える」『子どもの日本語教育研究』第1号
- 加古里子(1973) 『おたまじゃくしの101ちゃん』 偕成社
- 加藤ひとみ・大國ゆきの(2015) 「幼児期の言葉の獲得～幼児期の発達特性と幼稚園での教育～」『東京成徳短期大学紀要』第48号
- 柴田長生・平野知見・後藤紀子・大森弘子(2019) 「幼児期後期における絵本の読み聞かせと、言葉の育ちを形成する背景に関する研究－保育者のコミュニ

- ケーション能力・自己統御能力に着目して-」『京都文教大学 臨床心理学部研究報告』第12集
- 菅原光二(1984) 『科学のアルバム ツバメのくらし』 あかね書房
- 杉本孝美・山川智子・中井精一(2025) 「ESDを促進する復言語・複文化の環境づくり」日本国際理解教育学会 第34回全国研究大会発表
- 鈴木まもる(2009) 『ツバメのたび』 偕成社
- 高橋多美子・高橋敏之(2007) 「幼児期における自然体験の重要性の再検討と教育的意義」『理科教育研究』Vol.48 No.1
- 館野鴻(2013) 『ぎふちょう』 偕成社
- 津守眞(1997) 『保育者の地平：私的体験から普遍に向けて』 ミネルヴァ書房
- 長谷川哲雄(2017) 『はなむぐり』 福音館書店
- 前川豊子(2017) 「遊びの中の言葉の発達に関する一考察」『佛教大学教育学部学会紀要』第16号
- 松居直(2013) 松居直講演録 「こども・えほん・おとな(「絵本で子育て」業書5)」 『NPO「絵本で子育て」センター』
- 宮地敏子(1996) 「絵本による異文化理解についての一考察」『国際幼児教育研究』第3号
- 村田康常(2018) 「領域『言葉』における遊びと想像力－言葉を楽しむ遊び感覚－」『柳城こども学研究』第2号
- 文部科学省(2017) 『幼稚園教育要領』 フレーベル館